

地域のカ×アートのカ：静岡での試み

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-04-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 白井, 嘉尚 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/00028145



地域の力
アート×
静岡での試み
の力

白井 嘉尚

静岡大学名誉教授／絵画、現代美術

はじめに

近年日本各地で、場の記憶や特色に着目した様々な「芸術祭」が開催され、人々の注目を集めています。その地域の住民にとつてはかけがえのない、しかし身近すぎで価値に気づきにくい「資源」にアートの光をあてることで、ツーリズムの新たな波を呼び起こした事例も少なくありません。

いずれにしても来場者は、交通の動脈から外れ、あるいは産業の衰退によつて時が止まったかのような場所に労を惜しまず足を運びます。そして、その旅の過程や、場と作品との関係をまるごと体験するところに際だった特徴があるといえるでしょう。

ここでは、そのような身近な地域や暮らしを新たな視線で見つめなおすアートプロジェクトについて、私が関わる地域連携による「めぐりりアート静岡」と、静岡県東部・伊豆での実践、そして県中部・西部で展開されている様々な取り組みを紹介させていただきます。

I めぐるりアート静岡

「めぐりりアート静岡」は、二〇一三年度に文化庁助成による静岡大学アートマネジメント人材育成事業の実習として始まりました。モデルは、「地域の過去と現在、場と人を結ぶ」という目的を掲げ、静岡県立美術館の川谷承子学芸員が中心となつて実施した「むすびじゅつ」（二〇一二年度）です。「めぐりりアート静岡」は、組織横断型のキュレーションチームが企画を担い、地域の大学、美術館、行政等が連携しリアル（年一回）形式で開催されてきました。

作家の選定にあつては、静岡にゆかりのある若い世代の作家に着目するとともに、仮に静岡にゆかりがない作家であっても、「地域との関わり」をテーマとする作家に参加を要請しました。美術展ではありませんが、既成の「美術」の枠にとらわれることなく、異なるジャンルの表現が多様に交錯するアクチュアルな場であることを目指しました。

なお、この講座では、限られた時間のなかで「めぐりりアート静岡」の特色を紹介するために、「インスタレーション」、「美術史との距離」、「写真・映像によつて、



図1 《トポス ～記憶の風景～》御宿 至, 2019(写真:遠藤幸廣)

「国際交流」、「ワークショップ」、「パフォーマンスアート」 という六つの切り口を用意しました。

(1) インスタレーション

「インスタレーション」という美術用語は、わが国では一九七〇年代ないし八〇年代から使われるようになってきました。それは、限りなく自由な表現形式で、いわば、その場限りのもの。したがって、「場」との深い関わりによって成立します。また、従来の美術ジャンルの枠にとらわれず、音楽や映像などとシームレスに繋がるのが可能です。

さて、ここではインスタレーションの典型的な作品として、「めぐるりアート静岡 二〇一九」に参加いただいた、富士宮市在住の彫刻家・御宿至氏の《トポス～記憶の風景～》(図1)を取りあげたいと思います。

御宿氏は、富士宮市に生まれ、小学校から高校までを静岡市で過ごし、その後、イタリア国立ローマ美術アカデミーで彫刻を学びました。二〇〇五年にはローマ大学付属現代美術実験美術館、二〇〇六年にはスポレート現代美術館の企画によって個展が開催されています。氏は独自の抽象彫刻でも高い評価を受けていますが、生活の

中のありふれた事物に着目し、それらの驚くべき組み合わせによって、私たちの感性と思考を刺激する精神的な場の創出を試みています。

さて、この《トボス〜記憶の風景〜》ですが、ここで使われている事物は、すべて、建設会社の資材置き場にあつたもの。H形鋼や覆工板や消波ブロックなどが実用から解放されて圧倒的な存在感を放っています。

作品名に「記憶の風景」とありますが、この東静岡の市有地は旧国鉄貨物駅の跡地です。御宿氏は、この東静岡が貨物駅だった時代に、その上に架かる長沼陸橋から目にした、さまざまな荷物を積んだ貨車がたまっていった時の記憶を起点に制作したとのこと。いずれにしても、東西の文明あるいはローマあるいは静岡の記憶と現在、また自らの記憶と現在の往還によって、普遍的な精神性を見いだそうとするスケールの大きなインスタレーション、新たな「記憶の風景」が東静岡のヒロバに出現しました。

(2) 美術史との距離

「めぐりりアート静岡」は、ジャンル横断型のアートプロジェクトですが、そのベースは美術展です。ですが

ら、そこに展示される作品は、何らかの意味で美術史との関係におかれることとなります。ただその「美術史との関係」は単純ではありません。そもそも、近現代美術には、「美術」を根源的に捉えなおそうという考え方があるからです。

「めぐりりアート静岡」では、伝統的な技法や規範を受け継いで、その上で、独自の追求をしている作家にも参加いただき、またそれらの規範を解体して新たな表現を立ち上げる作家にも参加いただいています。そのいずれにもさまざまな展開が見られますが、ここでは、静岡県立美術館ロダン館での対照的な二つの事例を取りあげたいと思います。

まずは、伝統的な技法や規範をベースに独自の追求をしている作家として、二〇一七年の、浜松市在住の若手彫刻家、池島康輔氏の作品を見てみましょう(図2)。中央の黒い作品はロダン作品。《カレーの市民》の中の一体でブロンズ作品です。その左側が池島氏の作品《ダーマ》で木彫です。

氏は、彫刻家として西洋近代の系譜を深く学び、また西洋美術という点では後期ゴシック彫刻を研究、さらに日本の仏像や遠州地方の屋台彫刻からも技や心を吸収しようとしています。そして、それらを高度に融合して、

新たな彫刻を切り開こうとしています。

次に、第二回「めぐるりアート静岡」(二〇一五年二月開催)での、浜松市出身の作家、鈴木康広氏の《空気の人》(図3)を紹介させていただきます。

《空気の人》は、ビニールで作った人体のフィギュアにヘリウムガスが詰められ、風船のようにロダン館の空中に浮かんでいます。近代彫刻の巨匠・ロダンの作品



図2 《ダーマ》池島康輔, 2010(写真:遠藤幸廣)

は、わが国にあつては西洋美術の代名詞のような存在です。ダイナミックな動きをほらむ英雄的な人間像。その重厚なブロンズ作品の上に、透明で軽やかでユーモラスな作品を浮遊させました。およそ百年の時を超え、美術や彫刻についての真逆にも見える立場の違いを超えて、まれに見る斬新なコントラスト、そしてユニークな対話 が成立したように思います。

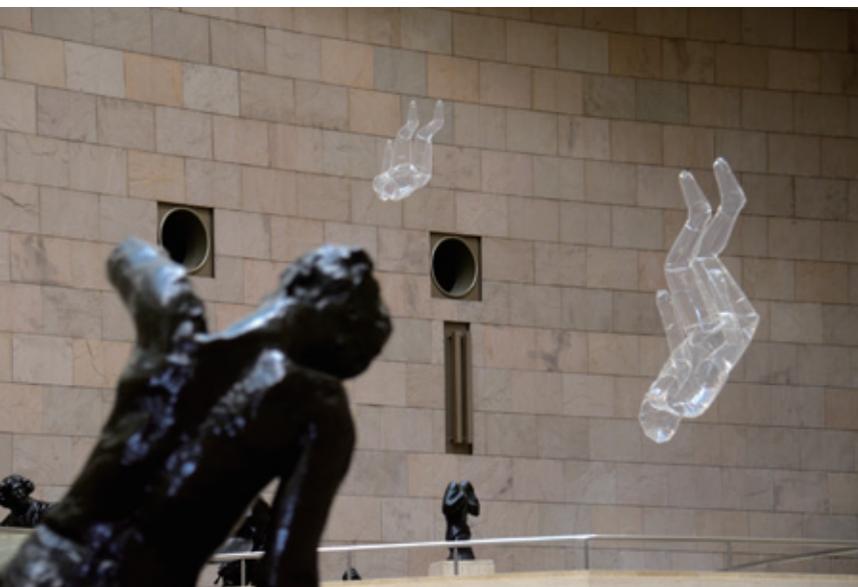


図3 《空気の人》鈴木康広, 2015(写真:遠藤幸廣)

(3) 写真・映像によって

「めぐるりアート静岡」では、写真や映像作品もしばしば登場しました。それは、私たちの時代のアクチュアルな表現手段だからです。ここでは、その中から、「めぐるりアート静岡 二〇一九」に参加いただいた多々良栄里氏を取りあげたいと思います。同氏は静岡市生まれです。お祖父さんが写真館を営んでいたので、幼時から写真は身近だったそうです。白梅学園短期大学では日本文学を専攻。卒業後は静岡に戻り、出版社でライターとして働いたとのこと。そんななか、しだいに写真に関心が移り、カメラマンに師事して一三年間にわたって発表のあてもなく、日々目にするモノを、ひたすら撮り続けたようです。藤枝駅南の実家の周り、自身で中古カメラ店を開業していた静岡市内の駒形通りなど。そこで出会った人々と、そのさりげない日常が写されました。ただ、それらのネガフィルムはその後、自室の片隅にしまい込まれたままでした。二〇一一年の東日本大震災では、そんな当たり前の日常が失われ、そのことで、かつて無心で撮り続けた「日常」こそ、かけがえのない大切なものだったことに気付いたようです。



図4 《吹く風も》多々良栄里, 2019(写真:加藤和夫)



図5 《アナログインデックス》ノエル・エル・ファロル, 2018 (写真:加藤和夫)

展示会場は、代表作『銀の匙』で知られる文学者、中勘助の文学記念館です。『銀の匙』には、中勘助自身の幼年期から少年期にかけての、明治時代の日々の暮らしが、みごとに綴られています。多々良氏の写真(図4)も、その市井の人々に向けての眼差しが、『銀の匙』と深く通底しているように感じました。コロナ禍の今、再び目にしたい作品です。

(4) 国際交流

「めぐるりアート静岡」は、国際交流の舞台でもあります。これまで、フィリピンの作家二名、韓国の作家一名を招聘しました。それら作家に直に出会い交流することで、垂言語的な力をはらむアートの豊かな可能性と、教科書やメディアを通じた情報では知ることの出来ない互いの歴史や文化に対する興味、またリスペクトを感じることが出来ます。

ここでは、「めぐるりアート静岡 二〇一八」における中勘助文学記念館でのフィリピンの作家、ノエル・エル・ファロル氏の作品を紹介させていただきます。ファロル氏は、一九八八年から一九九〇年まで静岡大学大学院への留学体験があります。帰国後はフィリピン大学などで美術分野を担当するとともに大学院で考古学を学ぶなど幅広い知的関心をお持ちの美術家です。参加依頼にあたって、まずは中勘助の代

表作『銀の匙』の英訳本を送ることで、場の特色をつかんでいただくことにしました。寄せられた作品は、本をテーマにしたもの、日記をテーマにしたもの、そしてファロル氏自身の幼年期の記憶をテーマにしたものの三系統で、みごとに私たちの期待に答えてくれました。

たとえば、厚いガラスを積層しブロック状にしたガラスを削って紡錘形にしたオブジェ(図5)。そのオブジェの形は、フィリピンのお米の形からとられているのとです。またガラスの中には虫のイメージが埋め込まれています。それは少年時代にお祖父さんの農場で、水たまりに落ちて溺れている虫を見た記憶と、木の樹液の中に閉じこめられている虫を見た記憶を表しているとのことです。そのようにファロル氏の作品は、自身の記憶にある光景や体験、そして作家として訪れた様々な国での経験や記憶が多様な手法で繰り広げられていました。

(5) ワークショップ

次は、ワークショップという切り口で、「めぐりりアート静岡」を紹介したいと思います。美術分野のワークショップも多種多様ですが、その特徴は概ね次のようにいえるでしょう。

・答えはない
・誰でも参加できる

たとえば、「めぐりりアート静岡 二〇一九」での、陶芸家きむらとしろうじんじん氏による「野点」(図6)。同氏は、ドラアグクイーン装いで、リヤカーに陶芸窯を乗せて、日本中で楽焼のワークショップを行うアーティストです。じんじん氏が用意した素焼きの茶碗に参加者が絵付けをし、氏によつて焼成され、その場でお抹茶をいただくという野点会にもなっています。

それにあたっては、場所の選定がとりわけ重視され、二〇一九年はボランティアスタッフと共に、静岡市内で「お散歩会」を開催。二日間かけて場所を見て歩き、最終的に、静岡駅北側の紺屋町商店街にひっそりと鎮まる小椋神社境内での開催になりました。二〇二〇年はコロナ禍の影響で開催が危ぶまれましたが、感染リスクを極力おさえるような形で、東静岡アート&スポーツ/ヒロバで実施することができました。

続いて、第二回「めぐりりアート静岡」(二〇一五年二月開催)での、乾久子氏による「くじびぎドロイング」(図7)を紹介したいと思います。

それは、なんらかの言葉が書かれている「くじ」が用意されていて、参加者はそのくじを引き、そこに記され



図6 《野点》きむらとしろうじんじん, 2019(写真:望月一弘)



図7 《くじびきドロイング》乾 久子, 2015(写真:加藤和夫)

ている言葉を「お題」として絵を描かなければならないというものです。そしてその絵を描いた人は、別の紙に思い思いの言葉を記して新しくじをつくらなければなりません。だから、だれでも参加でき、無限連鎖的に続けることができます。

「お題」の言葉はたとえば、「いじわるなひと」「とだ

なに板前さんおいとくね」「あなたの秘密をひとつ絵にしてください」など。難しいお題であっても、それを引いてしまつたら、絵に描かなければなりません。子どもも大人も、誰もが楽しむことができ、また、絵の上手い下手など全く関係なく、参加者の遊び心や、想像力を解きはなつ優れたワークショップといえましょう。

(6) パフォーミング・アート

「めぐりりアート静岡」ではパフォーミング・アートも積極的に取り上げています。それは、眼だけではなく言葉や音や身体など感覚が複合的に沸きたつ場を創造するためです。

ここでは、ダンサーであり振付家のアオキ裕キ氏率いる、路上生活者／経験者によるダンスグループ、「新人Hソケリッサ!」の公演を取りあげたいと思います。リーダーのアオキ氏は、元ジャニーズ系ステージのバックダンサーという経歴の持ち主です。二〇〇一年、ニューヨーク滞在中に、九・一一のテロ事件に遭遇し、ダンスとは何かを問いなおすようになったとのこと。

「日々生きることに向き合わざるを得ないからだ」を求め、二〇〇五年から路上生活者や路上生活経験者によるダンス、「新人Hソケリッサ!」を開始しました。

「めぐりりアート静岡 二〇二〇」では、そのダンス作品《日々荒野》(図8)を、一〇月三十一日と十一月一日の二日間にわたって三公演実施しました。初日は、かがり火を焚いての夜の公演。二日目は、午前・午後各一回の公演が行われました。

アオキ氏以外のメンバーは、体型も身のこなしもダン

サーにはほど遠く、ショービジネスとは対極にあるダンスといえるでしょうが、アートとは、そもそも、人に見えるためのものである前に、祭儀でもあり、祈りや、やむにやまれぬ魂の叫びであったはずです。そんな根源的な問いをほらむ公演でした。



図8 《日々荒野》新人Hソケリッサ!, 2020(写真:石川綾子)

II 美術でめぐる東海道 in 静岡

静岡県内でも、各地でさまざまなアートプロジェクトが行われ、それぞれ特色を持っています。試みに、ここでは以下について触れてみたいと思います。

東部・伊豆

- (1) 田方郡函南町、伊豆市他での「クリフエッジプロジェクト」
- (2) 伊豆の国市大仁の「知半アートプロジェクト」
- (3) 沼津市の青木一香

静岡県内の広域的な芸術祭 東部・中部・西部

- (1) 富士本町、富士宮、富士川、蒲原の「富士の山ピエナーレ」
- (2) 島田市と川根本町にまたがる「UNMANNED 無人駅の芸術祭／大井川」
- (3) 掛川市の「かけがわ茶エンナーレ」

静岡県中部・西部の エリア集中型アートプロジェクト

- (1) 旧引佐郡の「天地耕作計画」
- (2) 島田市笹間の「ささま国際陶芸祭」
- (3) 掛川市大須賀の「遠州横須賀街道ちっちゃな文化展」

東部・伊豆

(1) クリフエッジプロジェクト

クリフエッジプロジェクトは、二〇一三年に三島市在住の美術家・住康平氏の呼びかけに応えた伊豆のクリエーターらによって結成されたアートプロジェクトです。「伊豆半島の特色ある地形・地質などの自然資源」と「自然災害の歴史、記憶のアップデート」をテーマとして様々な実践を重ねてきました。現在準備中の新たなプロジェクト、「躍動する山河」の企画書に、アートプロジェクトを通して「伊豆半島の自然環境を考え、暮らしや歴史を認識できるのではないか」との見通しが記されていますが、それだけ見ても通常のアートの枠にはおさ

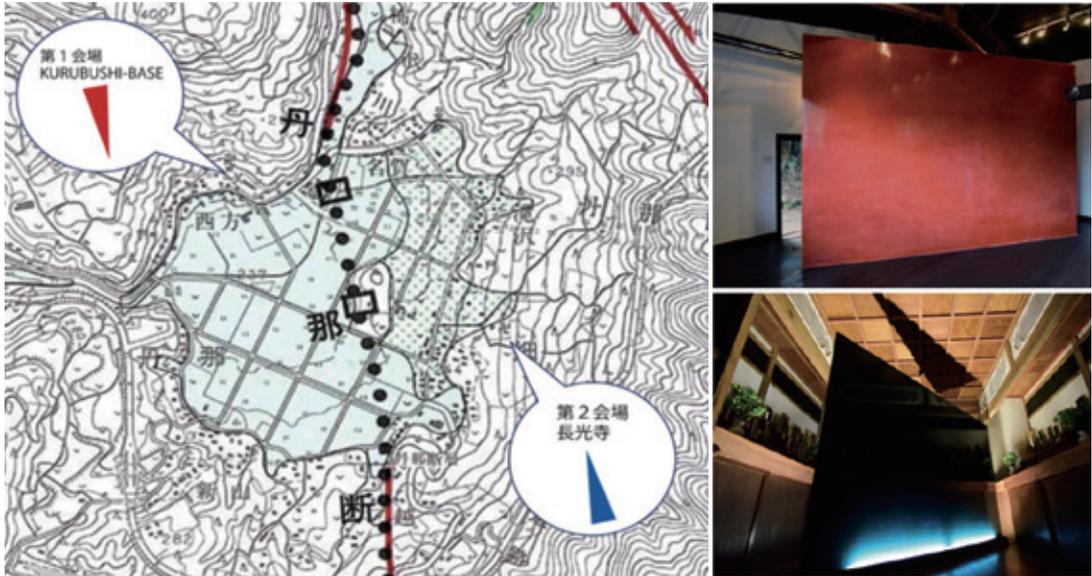


図9 「半島の傷跡」Cliff Edge Project, 2015(写真:内野り江子、図版:住康平、出典:国土地理院 地理院地図(電子国土Web) 活断層図)

まらない射程をもった取り組みといえましょう。

まず、二〇一五年に開催されたプロジェクト、「半島の傷跡」(図9)について。図版左側にあるのは、伊豆半島のつけ根に位置する丹那盆地の地図です。その真ん中、南北に点々と連なる線は「丹那断層」と名付けられた活断層を示しています。まさにこの展覧会は、その丹那断層と、それによって引き起こされた一九三〇年の北伊豆地震、そして、そこを東西に貫通させるべく掘り進められていた丹那トンネル工事との関わりをテーマとしています。

断層の西側にあるクルブシベースというギャラリーと断層の東側に位置する寺院、長光寺が会場で、それぞれに、方位磁針の先端からとられた形の造形が設置されました。そしてその「磁針」は、断層のずれた方向を指し示しています。西側の造形は、ベンガラ色をした漆喰が施された作品で、東側の造形は青い色をした漆が施された作品です。そして、漆喰の作品は、現代大津磨きという、高度な漆喰の技を使って断層側の面が鏡のように仕上げられました。漆の造形は、呂色仕上げという、これも高度な技法を使って断層側の面が鏡のように仕上げられています。

二つの造形を鏡面状に仕上げた理由は、一九三〇年に

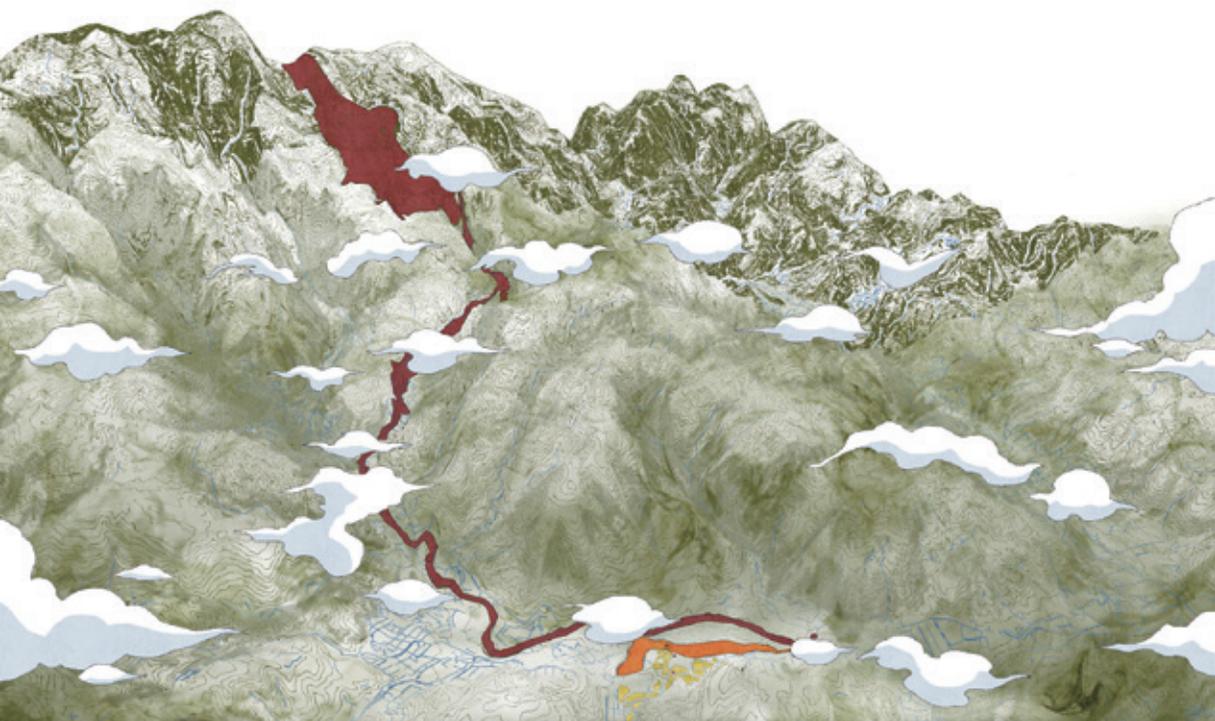


図10 《躍動する山河》伊藤允彦、中澤美和, 2021

発生した北伊豆地震に際して、工事中の丹那トンネルの水抜き用のトンネルが南北に二メートルほど横ずれし、そのずれた断層が鏡のようになった、非常に特殊な「断層鏡面」という現象が観察されたからとのことです。「アートの」を、大地の成り立ちや自然災害といった問題と結び付けて考える、斬新かつ壮大な取り組みといえるでしょう。

続いて同プロジェクトの最新の計画を紹介させていただきます。それは二〇二一年の一月末から二月にかけて開催が予定されている「躍動する山河」展です。

「躍動する山河」とは伊豆半島全体を指すものと思われませんが、ここでは中伊豆の月ヶ瀬や、浄蓮の滝や、昭和の森の東側に位置する一帯が取りあげられるようです。具体的には、三三〇〇年前に噴火したカワゴ平。そして、狩野川台風の大雨で山体崩壊をおこした伊豆市いかたば筏場地区の蛇喰山じやばみやま。そしてその北側の上白岩地区にある、東日本では珍しい縄文時代後期の環状列石の遺構が残る上白岩遺跡です。

図10はそれらの位置関係を示した絵図ですが、赤く示されているのが、カワゴ平噴火による溶岩流が作りだした地形とそれに連なる大見川。一番上が噴火口、大見川の最初の屈曲の右手（西側）が蛇喰山、川を下りオレン

ジ色で示されたあたりが上白岩地区です。（この絵図は、地形学を専門とする研究者の伊藤允彦氏と日本画家の中澤美和氏の協働による絵画作品でもあります。）

そしてその上白岩地区には、このプロジェクトの三つの会場が集積しています。それは上白岩遺跡の他、鎌倉時代の棟札が残る大宮神社と、地域の歴史資料を収蔵する伊豆市資料館です。

大宮神社では、図10を描いた中澤氏が伊豆半島の特異な景観に触発されて制作した四曲一双屏風が展示される予定。伊豆市資料館では、中澤氏とともに絵図制作を担った伊藤氏と、現代美術家の清水玲氏、映像作家の磯村拓也氏による作品が発表されるとのことです。またそのテーマはカワゴ平噴火を遠因とする狩野川台風による土砂災害、蛇喰山の山体崩壊、狩野川氾濫との関係。また観光資源への影響や復興事業などとの関係が示されること。上白岩遺跡会場では、プロジェクトリーダーの住康平氏がメンバーの左官職人・鈴木政希氏と、大工であり木工作家・千賀基央氏とともに、環状列石と呼応するようなモニュメントを制作。また会期中には、大宮神社と上白岩遺跡で、舞踏家・松岡大氏の舞踏公演が予定されています。

(2) 知半アートプロジェクト

知半アートプロジェクトは、伊豆の国市大仁にある江戸時代の古民家「知半庵」を場として行うプロジェクトです。特定のアートジャンルに特化限定せず、二〇〇七年より年に一度のペースで力量のあるアーティストを招き、場の可能性を存分に引き出すサイトスペシフィックな企画を展開。菅沼家の菅沼謹吾（雅号・菅沼知半）の孫として「知半庵」で生まれたあわやのぶこ氏が、「知半庵」の心を、この家で生まれた者として受け継ぎ、現代に生かしていきたいと願い、文化交差をテーマとして開催しているものです。

同プロジェクトはジャンルにとられない自由さが特色ですが、ここでは、本講座の主題に沿って美術のセシル・アンドリュ『沈黙の鼓動』展（第六回 知半アートプロジェクト、二〇一四）（図11）と、六田知弘写真展『記憶のかけら』（第八回 知半アートプロジェクト、二〇一七）（図12）を取りあげたいと思います。

セシル・アンドリュは、フランスのアーティストで、「言葉」に深い関心を寄せています。知半庵では、屋内と屋外で二様のインスタレーションを展開しました。屋内展示では、連続的に連なる三つの座敷のそれ



図11 『沈黙の鼓動』セシル・アンドリュ、第6回 知半アートプロジェクト

Silent Pulse 2014, Cecile Andrieu photo by Tadasu Yamamoto, © Chihan Art. All Rights Reserved.

それ、真ん中の二畳分の畳が外され、そこに、柔らかな質感の事物がせりあがっています。それはシュレッターで細かく裁断された紙片を端正に集積したものです。一番手前の部屋の紙片は、あわや氏の曾祖父の遺言証書の複写をシュレッターにかけたもの。次の部屋には、この家が地域の文化拠点でもあった時代の句会や文人との交流の中で生まれた言葉がやはり複写されシュレッターで裁断され集積されたもの。一番奥の部屋は奥座敷で、この家のなかでも特別な部屋。お産に使われ、あわや氏自身が生まれた部屋でもあるとのこと。そしてその初宮参りの産着が複写され、それをシュレッターにかけたものが柔らかく重ねられています。紙に記された言葉・文字は細かく裁断されることで意味を失い、その余韻が消え残っているかのようです。それは「沈黙」と言ってもよいでしょう。そしてその「余韻」は確かに「鼓動」しているのかもしれませんが。

屋外展示は邸の裏手、栗の林を抜けた裏山の裾の小高い場所でした。そこに一对の石の祠が鎮座し家と敷地を守っています。その周囲には孟宗の竹藪があり、そこに立派な檜の木が何本もそびえています。アンドリュ氏はその木の幹に、ドーム型のボタンのような大きなオブジェを取り付けました。それは文章の最後に



図12 「記憶のかげら」六田知弘, 第8回 知半アートプロジェクト
Shards of Memory, 2017, a photographic installation at
Chihan Art Project. Image © Chihan Art Project and MUDA Tomohiro.

つける句点もしくはドット。すなわち、そのことで来場者はアンドリュウ氏がしつらえた豊かな「沈黙」の前にたたずむのではないでしょうか。そして檜の木は檜の木でありながら謎めき、来場者の想像力を喚起する徴しるしとなるのです。

次いで、六田知弘写真展『記憶のかけら』（図12）を紹介させていただきます。

二〇一一年三月一日に起きた東日本大震災。怖ろしい天災であり、また原発事故は人災でもありました。その被災地に残されたモノたち。写真家・六田知弘氏はその一つひとつを拾い上げ画用紙の上に置いてカメラに収めました。それら全ては誰かに使われていたモノたち。さまざまな記憶を宿すモノたちは、そのかつての日常の役割や面影を留めながらも、そこには怖ろしい震災の記憶が刻印されています。六田氏は、それを克明な写真として知半庵の室内に埋め込みました。

裏庭では日本やヨーロッパで撮られた、「石」の写真が屋外展示可能なボードに転写され、インスタレーションとして展示されました。

また、あわや氏が、この写真展に近くの小学生をクラスで招待したことにも感銘を受けました。津波によって渚に打ち上げられた事物を撮影した六田氏の写真は、実

物以上のリアリティを帯びています。子どもたちはそれをどのような思いで見入ったことでしょう。

(3) 青木一香

本講座は当初、沼津のプラサヴェルデで行われるはずのものでした。沼津といえば青木一香（洋子）氏の活動を素通りするわけにはいきません。

青木氏は東京藝大の油画科出身ですが、お父さんの影響で子ども頃より親しんだ書から多くのものを汲み取って、この時代の、全てがやり尽くされたかのような絵画の可能性を超えてゆきます。それは日本人また東アジアのアーティストにとって、いつか誰かが追及すべき大きなテーマだったのではないのでしょうか。加えて青木氏は、一九六〇年代の終わりから今日に至るまで、沼津や県東部で美術を志す若者にとって指導者であり、また先輩でありました。

沼津美術研究所を主宰（一九六八〜二〇〇九）。さらに、沼津において身近に現代アートに触れる場所としてE-SPACE（二〇一〇〜二〇一五）を開廊。そして近年は青木氏を慕う若手作家とともにEN（二〇一六〜二〇一七）、EN/DHARMA（二〇一八〜）といったアート

の場造りに取り組んでいます。

この写真(図13)は、二〇一〇年、沼津御用邸記念公園で開催された『青木洋子の屏風展』の様子です。この展覧会の見どころは、なにも旧御用邸という場の記憶や明治時代の木造建築との関係性だと思います。次いで、屏風という絵画形式の今日的な可能性でしょう。場との関係性という視点で最も鮮やかな印象を受けたのは、ここに掲載した部屋とは別の、御座所という部屋に広げられた二点の屏風でした。それは二曲一隻の《風影》と四曲一隻の《海の声》。淡墨と中墨のたつぷりとした筆触が不規則かつ優雅に乱舞する《風影》は松の枝を吹き抜ける風を想起させ、《海の声》もその筆触がざざ波、寄せる波、また光のきらめきや風のように、開放的な庭としてその背後の海原に向かって端然としつらえられています。百年前の面影を残す沼津御用邸記念公園の西附属邸と、和紙と墨による現代絵画としての屏風との出合いは、幾重にも時間が輻輳する興味深い試みでした。



図13 『青木洋子の屏風展』沼津御用邸記念公園, 2010 (写真:白井嘉尚)

静岡県内の広域的な芸術祭 東部・中部・西部

静岡県内で現在行われている広域的な地域芸術祭を三つ紹介したいと思います。

(1) 東部の「富士の山ビエンナーレ」

二〇一四年からビエンナーレ（隔年）形式で始まり、今年（二〇二〇）は富士本町、富士宮、富士川、蒲原をエリアとして開催されました。（※コロナ禍によって土日・祝日のみ）

(2) 中部の「UNMANNED 無人駅の芸術祭／大井川」

島田市と川根本町にまたがる大井川鐵道の無人駅を会場とし二〇一七年から毎年開催されています。

(3) 西部の「かけがわ茶エンナーレ」

二〇一七年に、掛川市を六つのエリアに分け開催されました。トリエンナーレ形式（三年に一度）ということで、第二回は二〇二〇年にあたっていましたがコロナ禍によって二〇二二年に延期となりました。

(1) 富士の山ビエンナーレ

「富士の山ビエンナーレ」（主催：富士の山ビエン

ナーレ実行委員会）は、広いエリアに散在する古民家・商店・寺社仏閣・倉庫・空きビルや空き地など、何らかの特色ある場を会場としていますが、その場の選定が秀逸だと思います。私はその全ての会場に足を運んだわけではありませんが、それでもこのエリアには「隠れた名所」とも言うべき場所が多数あることを知りました。第一回を含めると由比、蒲原、富士川、富士本町、芝川、富士宮といった、まさに広域から磨けば光を放つ場を探し求め、所有者の理解を得、アートの場として準備を整えることは並大抵の労力ではないでしょう。関係者のそのような尽力が、地域の芸術祭を支えているのだと思います。

いずれにしても、多様な会場はそれ自体地域の記憶が刻まれたタイムカプセルであり、そこで展開される作品は全てその場との関係性において成立します。

たとえば、二〇一四年の第一回ビエンナーレでの由比エリアをサイトとした平川渚氏のケースを見てみましょう。作品《通過するもの》は、漁で使う網をテーマにすること、この町の暮らしと記憶を浮かび上がらせました。会場は、由比の旧東海道に面した民家です。桜エビ漁に関係している家の一室に、大きな不思議な「網」が吊り下げられています。それ以外その部屋には何も手を

加えられていません。網はこの町の漁師さんにとって無くてはならないものです。平川氏の「網」は何の役にもたたない網ですが、彼女がビエンナーレに向けてこの家に滞在し、漁師さんに教えてもらった網の編み方で昼夜を問わず一心に制作している姿を見て、何人もの漁師さんが手伝ってくれるようになったとのことでした。

来場者の視線は軽やかな「網」を「通過し」、それが設置された場に刻まれた分厚い時の流れを受けます。また同時に、その部屋はアート作品によって異化されて、奇妙な存在感を帯びて来場者を見つめ返しているように感じました。

(2) UNMANNED 無人駅の芸術祭

／大井川

「無人駅の芸術祭」（主催：NPO法人クロスメディアアしまだ）は、衰退した地域の象徴でもある無人駅と正面から向き合う、その目の付けどころが素晴らしい。このような機会がないと外から無人駅を訪れる人はほとんどないでしょう。しかし行ってみると、そこには、飾り気のない大井川流域の雄大な光景があり、地域の物語があり、地域とアートとのコラボレーション

ンがありました。

たとえば、二〇一九年に神尾駅で展開された中村昌司氏の《赤いささふね》。中村氏は、大井川鐵道沿線のまさに現在は無人駅になっている抜里駅近くの集落の出身です。氏はおよそ半世紀前、高校生の時に、大井川鐵道を使って通学していたとのこと。その頃は、通勤通学時間帯には電車も満員だったとのことでした。大雨が降ると、よく神尾駅前後で山が崩れ不通となり、その時には、線路を歩き迎えに来た電車に乗換えたことが多々あったそうです。

今では、旧駅舎は、入口の窓ガラスは割れ、中は資材が散乱し、壁は壊れ、荒れ果てていますが、ホームから遠く見える大井川は、往時と何も変わらない景観を示し続けています。

さて、神尾駅に近づくと来場者を出迎えるかのように大きな《赤いささふね》が、木と木の間に浮遊して（巧みに吊り下げられて）います。また、駅舎の周りや線路近くの山裾には、地域住民の協力によって作られたという、無数の小さな《赤いささふね》が地面から芽生えたように飾られています。それは彼岸花のようにも見えました。華やかでありながら、死者への手向けのようにもあり、祈りのようでもありました。

(3) かけがわ茶エンナーレ

「かけがわ茶エンナーレ」（主催：かけがわ茶エンナーレ実行委員会）は二〇一七年に、お茶と地域との深い繋がりを掲げ、市全域を六つのエリアに分けて展開しました。

ここでは、「めぐりアート静岡」にも二度ご参加いただいた彫刻家・木下琢朗氏の仕事を紹介させていただきます。氏は、「東山・日坂」と名付けられたエリアにあつて、標高五三〇メートルの山頂近くまで茶畑が広がる粟が岳で作品を展開しました。ちなみに粟が岳の茶畑は、世界農業遺産に指定された「茶草場」という農法がとられていることでも知られています。また山頂からの眺めは、大井川の扇状地と駿河湾、また伊豆半島と富士山、南アルプスが見渡せる大パノラマが広がっています。

その山頂近くの、普通なら部外者が足を踏み入れることのない植林された檜ばやしの中で、当時掛川市に在住していた木下氏が「森の再生」をテーマにした作品《刀耕火種》を発表しました。刀耕火種とは聞き慣れない言葉ですが、焼畑農法を意味するようです。そこに氏は自然と人との深いつながり、また生命のサイ

クルへの共感を込めています。その林に生えていた檜の木を間伐し、それを素材に、チェーンソーで種子の形を荒取りし、次いで丸太をそのまま燃料とする「木こりストーブ（スウェーデントーチ）」の手法で木の芯を燃やして成形します。それは「森の種」であり、「次のいのちを照らす象徴」として林間に「播種」されました。

静岡県中部・西部の エリア集中型アートプロジェクト

次に、静岡県中部と西部の、限定されたエリアで展開されている（いた）、三つのアートプロジェクトを取り上げたいと思います。

(1) かつて、引佐郡（現浜松市北区）細江町と引佐町で展開された「天地耕作計画」

(2) 島田市の山村、笹間で二年に一度開催されている「さざま国際陶芸祭」

(3) 旧小笠郡大須賀町、現掛川市大須賀地区で、一九九九年から毎年開催されている「遠州横須賀街道ちっちゃな文化展」

(1) 天地耕作計画

「天地耕作計画」は、細江町在住の村上誠氏・村上渡氏兄弟と、引佐町在住の山本裕司氏によるアートプロジェクトで、活動期間は一九八八年から二〇〇三年までの一五年間でした。「それぞれ生まれ育った山野」をフィールドとして、木や藁、石や土などを用い、造形表現の根源を探る活動が展開されました。オーストラリアのパス（一九九二）や、フィンランドのラハティーほか（一九九七）で大規模な実践を繰り広げたことも特筆されます。

一九八九年三月に公開された「耕作」には、「湖と山を巡る美術のフィールドワーク」という副題が付され、「湖」細江町の村上兄弟と「山」引佐町の山本氏、まさにそれぞれのホームグラウンドが現場でした。その時の案内状に使われた写真は、県境を越えて接する奥三河黒沢地区に伝承されてきた民俗芸能「黒沢田楽」の一場面です。

そのことで、美術を神事と農耕、すなわち民俗学や民族学との連関の中で再考するという姿勢が表明されていたように思います。

村上誠氏が「耕作だより 一四 最終号」（一九九五）

で記した『「見せる美術」という近代的な枠組みを一度白紙に戻したい』という言葉は、表現をめぐる、芸術家と観客を峻別するあり方への批判であるとともに、祖霊や地霊や死者といった、かつては大切にされていた場の記憶に向き合う構えともいえるでしょう。

(2) ささま国際陶芸祭

次に、「ささま国際陶芸祭」を紹介したいと思います。

島田市の山間部にある笹間は、大井川鐵道の笹間渡という駅から、山沿いの道を約一〇キロメートルほど入っていったところにあります。昔は小学校も中学校もありましたが、今は、すべて廃校になってしまいました。

地域住民の熱意によって、その小学校の校舎がリノベーションされ、宿泊もできる「山村都市交流センター」として生まれ変わりました。そこを拠点に、二〇一一年から二年に一度のビエンナーレ形式で始まったのが、「ささま国際陶芸祭」（主催…ささま国際陶芸祭実行委員会）です。アートディレクターは、瀬戸を拠点に世界各地で陶芸の個展やワークショップをくり広げている道川省三氏。氏の豊かな人脈で、世界中から、クリエイティブな活動を展開している陶芸作家が、この山間部の

小さな集落に集まること自体、驚くべきことではないでしょうか。

メイン会場の山村都市交流センターやいくつかの民家などでは招聘作家の作品展示が行われ、元小学校の校庭に立ちならぶたくさんのテントでは国内外の陶芸作家の展示即売があり、地場産品の飲食ブースも設けられています。旧体育館では作品の公開制作やワークショップが開かれるなど、作家間の交流、村の人との交流、陶芸ファンなど来場者との交流が繰り返し広がっています。たとえば第四回目にあたる二〇一七年は、人口四〇〇人ほどの集落に世界一七の国から、約七〇人が来村し、四日間で三二〇〇人の来場者が訪れたとのことでした。またその回までに参加した陶芸作家は、延べ二七カ国二九四名に上るなどの拡がりを見せています。

(3) 遠州横須賀街道ちっちゃな文化展

「遠州横須賀街道 街並みと美の晴れ舞台 ちっちゃな文化展」(主催：遠州横須賀倶楽部)は一九九九年に始まりました。毎年一〇月第四週の金土日に開催され、町は「文化展」一色に染まります。ジャンルの幅広さと、作家をキャリアで隔てないおおらかさが特徴といえま

しょう。藩御用達の廻船問屋であった清水邸、堂々とした木造旅館の八百甚、古風な構えの商店や民家にもかかわらずの賑わいが蘇ります。

特筆されるのは、一九八七年に商工会青年部を中心に結成された「横須賀倶楽部」で、地域資源の掘り起こしと住民の交流を促す様々な活動を推進してきました。時代の波から取り残された街並みそれ自体の価値や、東京の神田明神祭りの原型を今に伝える三熊野神社大祭に着目し、魅力の顕在化に務めたようです。そのような流れの中から「文化展」が誕生します。発案者は当時町役場に勤めていた深谷孝氏で、その目的について企画書に次のように記しました。

「街並みは私たちの先達の『時を越えての贈り物』なのである。その、街道や町家をいかに磨き、守り育てていくのが我々後代の役目ではないか。町家のハレの場はお正月、四月のお祭りとは年二回ある。一年二回のハレの場だけでなく数多くのハレの場に登場させ、町の衆や多くの人々にこの宝物を見ていただきたい。…略…芸術は、街道・町家を考える、宝を磨くための『手』である。」

その「手」は、現代アート、写真、クラフト、書、造形ワークショップや音楽など多種多様ですが、どこか一

本筋が通っているようにも感じられます。それは、この文化展を支える人々の「街を熟知した長い経験」と、先達からの「時を越えての贈り物」すなわちこの町屋・街並みの場の力なのかもしれません。

おわりに

四年前（二〇一七）に文化庁の助成事業として実施した静岡大学アートマネジメント人材育成事業の活動の一環で、「芸術創作の源泉としての三保の松原」を掲げ、三部構成のイベントを実施しました。ここではその中から、第一部のみ紹介させていただきます。それは、御穂神社の舞殿で、三保出身のSPAC（静岡県舞台芸術センター）の俳優、宮城嶋遙加氏による、能に魅せられたフランスの舞踊家エレヌ・ジュグラリスと、能楽『羽衣』との繋がりについての朗読劇上演です。その原作は、静岡市清水区（当時は清水市）在住で三保をこよなく愛する遠藤まゆみ氏による「碧眼の天女物語―もうひとつの羽衣伝説―」（発行者…西貝和子、一九八四）です。その本の挿画を担ったのは、やはり清水区にお住まいでグループ幻触の中心作家と

しても高く評価されている鈴木慶則氏でした。そのように能楽『羽衣』から現在にいたるまで、三保の松原をめぐるつて繰り広げられた魂のリレーを浮かび上がらせる試みです。その場所に潜在する物語、そして地域にゆかりのあるアーティストを見出し出会いをもたらすことで、地域がさらに豊かになってゆくことを願いました。

ご清聴ありがとうございました。

なお、本ブックレットの発行にあたり、写真・図版の著作権者の皆さまより掲載へのご承諾と、温かい励ましのお言葉をいただきましたことに心より感謝申し上げます。